

特集

約束のメダル

カナダのバンクーバーで開催された冬季パラリンピックアルペンスキー男子全5種目に出場し、大回転座位で見事銅メダルを獲得した鈴木猛史選手(駿河台大、猪苗代高卒)。メダルを指して挑んだ。厳しい戦いの軌跡を振り返る。



大回転で獲得した銅メダルを持たせてもらった。鈴木選手が重ねてきた努力や今まで彼にのしかかっていたプレッシャーが、このメダルの重さに込められているような気がした。

カナダのバンクーバーで3月12日から21日まで開催された冬季パラリンピック。本町出身の鈴木猛史選手(21)は駿河台大、猪苗代高卒(以下敬称略)は男子アルペンスキー座位の全5種目に出場し、大回転3位スーパードouble、スーパードoubleで5位に入賞するなど大活躍を見せた。

まさかの日程変更

高校生だった前回のトリノパラリンピック。大舞台の緊張や体調不良などで実力を発揮できず悔しい思いをした。あれから4年、世界選手権やW杯などに出場し経験を重ね、選手として一回りも二回りも成長した鈴木。直前のアメリカで開催されたW杯でもスーパードoubleで2位、スーパードoubleで3位に入賞するなど、好調を維持したままバンクーバーパラリンピックに臨んだ。

満を持してバンクーバー入りした鈴木を待っていたのは、目まぐるしく変わる天候と日程だった。そのため、コース整備に時間のかかる高速系種目を後半にするなど、日程が変更された。鈴木が最も得意とする回転は、当初日程では最終種目だったが、最初の種目になってしまった。回転に合わせて応援に来るはずの両親の日程も合わなくなってしまう。「ヤバイな、明日か…」回転に向けてピークを持っていくようにしていた。

た鈴木の計画が狂った。正直、戸惑いを隠せなかったという。

悔いが残った回転

14日、回転のスタートを迎えた。メダル獲得の期待がかかる得意種目。鈴木自身「回転で金メダルを」という強い思いがあった。「緊張していたし、アイスバーンにどこまでエッジが噛むのか分からなかったの、で慎重にいった」という1本目は6位、3位との差は0秒82。逆転でメダルを狙える位置につけた。この差ならいけると思った。

おもいきり攻めていくと決めて臨んだ2本目、わずかなタイムを削るため、ポール際をセンチ単位で攻めた。得意の逆手でポールを払い飛ばし、快調に飛ばしていたが、ポール直前でポールに手が引つ掛かかってしまった。「やっちゃった。終わっちゃったな」と思った。結果は15位。調子が良かっただけに一層悔しさがつのった。しかし、いつまでも悔しがっている訳にはいかない。鈴木は両親や知人などに電話やメールで「回転がダメだった分、大回転で頑張る」と伝えた。

自宅からインターネットのライブ中継で息子の活躍を応援していた父保さんは「攻めていった結果だからしょうがない。子どものころから逆手を使っているが、あんなミスは見なかったが、頑張って耐えた結果がメダルにつながったから良かった」とレース振り返った。

メダル獲得の興奮も覚めやらぬ18日からは滑降、スーパードoubleとスーパードoubleの3レースが実施された。4年前のトリノでは4位入賞を果たした滑降だが、決して得意ではない種目。結果は11位だったが「視界も良く自分としては頑張った」と納得のレースだった。

続くスーパードoubleでは、直前の選手の転倒という不運に見舞われ、途中まで滑った鈴木が再スタートとなるハプニングもあったが、5位入賞という成績を収めた。

最終種目のスーパードoubleは、回転を得意とする鈴木に2つ目のメダルの期待が高まった。1本目のスーパードoubleで8位につけた鈴木は、2本目の回転で巻き返しを狙い積極的に攻めた。惜しくもメダルには届かなかったが、見事5位入賞を果たした。

全5種目で3位入賞1回、5位入賞2回という立派な成績を収めたが、「あれ(銅メダル獲得)で勢いに乗ればよかったのに、なんとなく安心してしまいました。それが今回の反省点」と鈴木は悔しさをにじませた。

「念願のメダルを取ることができてうれしかったが、今回も得意の回転ではメダルを取れなかった。うれしさ半分悔しさ半分」と2度目のパラリンピックを振り返った。



Photo by Isao Horikiri

鈴木が最も得意としている回転競技。曲る方向と逆の手(アウトリガー)を使ってポールを払う逆手はバランスを取るのが難しく、パラリンピックに出場する選手の中でも数人しか使えない高等技術。その滑りは他の選手から「踊っているようだ」と評される

たことがない。こういう大きな大会(パラリンピック)には魔物がいるなと思った」と話した。

大回転で銅メダル

16日の大回転は雨が降り、バーンも荒れた最悪のコンディションの中でのレースになった。とにかく落ちて滑ろうとレース中も自分に言い聞かせたという鈴木。雨を含んだ雪で苦戦する選手が多い中、悪条件の中でも安定した滑りで高いターン技術を披露した。1本目で3位につけると、2本目でも落ち着いた滑りで3位を守り抜いた。

ゴール後には右手を突き上げ、表彰式でも両手を突き上げて歓喜の表情を見せるなど、普段シャイな鈴木にしては珍しく感情をあらわにした。「うれしかったので、あれぐらい言たほうがいいのかと思って」と話したが、メダル獲得への周囲の期待は相当なプレッシャーだったに違いない。得意の回転での失敗をはねのけて、うれしい銅メダル獲得となった。

銅メダルを取った滑りに点数をつけてもらうと「正直50点以下です」と意外な答えが返ってきた。「雨でバーンも荒れていたの、アグレッシブに自分の滑りで攻めるといふよりは、ミスをしないうようにじっと耐えるレースだった。滑り自体はよく

最初は言わされたようなものだった でもそれは本当の夢になったんです



鈴木選手の両親
鈴木 保さん、弘子さん

小学校入学前から父保さんとスキーに出かけていた鈴木は、スキーが大好きでやさしい少年だった。交通事故に遭い、両足を失った後も鈴木は明るくやさしさは変わらなかった。「猛史は小さいころから地

パラリンピックのメダリストは
どのようにして成長してきたのか
最も身近で彼を見てきた人たちに聞いた

域の人にやさしくされ、声を掛けられて育ってきた。みんなはお前のことを知ってるんだから、ちゃんとあいさつするんだよと言っていて「と母弘子さんは言う。」
チェアスキーと出会い、鈴木は以前と同じようにグレンデに出かけるようになった。「福島でチェアスキーを始めたころは、周りの人がみんなお父さんくらいの年齢だった。だから猛史のスキーのお父さんはいっぱいいるんです。同級生が多かったのだから、最初のころはお父さんが楽しくてスキーに行っていたと思います」と弘子さん。
チェアスキーが楽しかった理由はもう一つある。「チェアスキーは友達と一緒に滑れる。チェアを履けば同じグレンデで、同じように滑れる。」そう言っていて楽しそうだったと両親は当時を振り返る。
父親であり、友人でもあるという保さんやチェアスキーを通じて知り合った仲間たちとの多くの体験は、現在の鈴木の本拠地になっている。

大学生になって迎えたパラリンピックの年。シーズン当初の不調はシートフレームにチェアを固定する位置が高かったこと。微妙な差だったが幼いころから鈴木は道具を見てきた保さんが気づいた。それを修正すると鈴木は調子も戻っていった。鈴木と保さんとの深い絆を表現しているようなエピソードだ。
パラリンピック大回転で銅メダルを獲得した鈴木。表彰台で両手を突き上げて喜んだ姿には、保さんも弘子さんも驚いたという。「あれはメダルというプレッシャーからの解放がうれしかったんじゃないのかな。あんな喜び方をするのは初めて見た。数年後は社会人として競技に臨むことになる。あのくらい自分の主張とか競争心を前面に出して、しっかりと頑張つてほしい」と保さんは話した。「猛史が事故に遭った時には、こんな悲劇があるのかと思ったが、それ以外は運がいいと思う。やさしい友だちや応援してくれる皆さん、いろいろな人に支えられたおかげでこういう結果を残せたのだと思う」と両親は声をそろえた。
鈴木はまだ21歳、世界でさらに飛躍するチャンスはまだある。そんな息子の今後について、保さんは「金メダルを取るまではスキーはやめないうえ」と予測する。なぜなら「小さいころからの夢だから」。最初は言わされてきたようなものだった。アナウンサーに夢は何ですかと聞かれて、金メダルと答えれば喜ぶ。それがいつしか鈴木の本拠の夢になっていた。
銅メダルは獲得したが、本当に欲しいものはまだ手に入っていない。回転競技での金メダル獲得を目指す息子を両親は陰ながら応援していくつもりだ。

「スキーができるの?」と言ったときの 目の輝きは忘れられないです

情野さんが手にしているのは、鈴木選手のチェアを整備するため自作した調整台



有限会社 アンクル
情野 操 代表取締役

会津美里町にある義肢装具製造の「有限会社アンクル」。社長の情野操さんが鈴木選手のチェアスキーのシートとカウル部分の製作を手掛けている。小学2年生のころに交通事故に遭い両足を切断した鈴木選手の義足を作ってから、十年の付き合いになる。

「ケニーくんみたいなすごい子がいるよ」会津若松市内の病院で看護実習をしていた情野さんの長女が父にこう話した。ケニーくんとは、足

一朝一夕ではメダリストにはなれない
人知れず努力する日々があった
支えてくれる人たちがいた

が不自由でもたくましく生きる少年の姿を描いたアメリカ映画の主人公両足を失ったことにもめげない元気な鈴木選手の姿がケニーくんにも重なって見えたのだ。
その後、鈴木と両親から義足の相談を受けることになった情野さん。「この子が娘が話したケニーくんか」初めて鈴木に会った情野さんはベットのうえで逆立ちするなど、映画の主人公以上に元気な鈴木の様子に心を打たれ、義足を作ることを決心した。「スキーはできないんでしょ」とがっかりしている様子の鈴木に情野さんはチェアスキーの存在を教えた。「スキーができるの?」と言ったときの鈴木目の輝きは忘れられないと話す。
その後、県障害者スキー協会の斎藤俊蔵会長を紹介したのも情野さんだった。チェアスキーを始めた鈴木は、瞬く間に腕を上げチェアスキーにのめり込んでいく。中学生になって、車いすに乗ることが多くなった鈴木とはしばらく顔を合せなかったが、テレビやラジオなどで活躍を聞き、陰ながら応援していた。
鈴木と鈴木のお父さんが久しぶりに情野さんのもとを訪れたのは20年5月のことある日曜日のことだった。以前は大阪の業者に依頼していたが、その都度調整に通うのが困難なので「情野さんが作ってくれませんか」と依頼された。義肢装具士の情

野さんにとつて、チェアスキーは全く未知の領域。「日本を代表する選手のチェアを引き受けたら、悩んでいる時間はなかった」という。「幼いころから猛史くんを知っている自分だからその力になれるかもしれない」と申し出を受けた。鈴木の見聞や要望を取り入れながら試行錯誤を重ねた。初めて製作したチェアスキーは、昨年韓国で開かれた世界選手権で大回転優勝、パラリンピック出場決定という結果をもたらした。
パラリンピックを家族と一緒に応援していた情野さんのもとに、回転の後「次は回転の分まで頑張ります」と鈴木本人からメールが入った。次こそはと期待していた大回転で、見事銅メダルを獲得。新聞社からの知らせを聞き、家族みんなでパンザイをして喜んだという。「メダル取れましたー」って猛史くんから電話が来たんですよ。よかったねって言うてみんまで喜んで。若いのに律儀で、かわいくて仕方がないですね」と話す情野さん。
「本人は覚えているか分からないですけど、猛史くんが競技を始めたころ、いつかおじさんの会社がスポーツ用品になってやるからと話したことがありました。今回やっとその約束を果たせた」とうれしそう笑顔を見せた。

「県民や猪苗代の皆さんにメダルを持って帰ってきます」
応援する会による激励壮行会の席上で
そう決意を示した鈴木選手。
約束を果たした彼は今、何を思うのか



町農村環境改善センターで2月14日に開かれた、鈴木猛史君を応援する会主催によるバンクーバーパラリンピック激励壮行会。鈴木選手を応援する町民ら約100人が激励に訪れた

バンクーバーから帰国した鈴木は25日に帰町。自宅をつかの間の休みを取ると、26日には「鈴木猛史君を応援する会」事務局長の新明哲也さんと一緒に会長である津金町長のもとを訪れ、凱旋の報告をした。

津金町長と対面した鈴木は「猪苗代町にメダルを持って帰るという約束を果たせてうれしいです。肩の荷が下りて楽になったというか、ほっとしています」と笑顔であいさつ。津金町長は「すいふんと重いね。このメダルは猛史君の努力の結果だ。わたしたちは応援する会の会員ですが、猛史君の頑張りで逆に励まされている。健闘を心からたたえたい」とねぎらいの言葉をかけた。

報告後、鈴木に今大会を振り返ってもらうとともにこれからの抱負を聞いた。

大会を振り返って。

「大回転でメダルを取れたのは良かったが、回転でメダルを取れなかったのは悔しい。日程の変更、天候や雪の状態など、条件はみんな一緒ですが、苦しいレースだった」

初めてメダルをかけたときの気持ちは。

「すごくうれしかった。まず苦労をかけた両親の顔が浮かんだ。親にメダルを見せることができる、そして猪苗代町にメダルを持って帰れると思うとうれしかった。今、自分が生まれ育った町に報告できてほっとした。やっとメダルを取ったという

実感がわいた」

「両親や大学の関係者の皆さんも応援に来てくれたが。」

「両親やお世話になっている人の前で表彰台に立ちたかったが、叶わなかったのが残念。途中棄権やけがなく、自分の滑りを見てもらったのは良かったと思う」

「たくさん声援を受けたと思うが。家族、応援してくださった皆さん、チームスタッフ、用具を提供してくれる皆さん、マネージャーや学校関係者など挙げればきりがなが、今まで支えてくれたすべての皆さんのおかげでメダルが取れたと思っています」

日本の障害者スキーを取り巻く環境は。

「世界と比べて日本は遅れていると思う。海外の一流選手はプロ選手として活躍しているが、日本はまだそこまでいっていない。例えばドイツチームはオリンピック選手とパラリンピック選手のワンピースは同じもの。待遇に差はない。パラリンピック後に出演したテレビ番組でも紹介されたが、日本ではオリンピックとパラリンピックでは報奨金は3分の1、補助金の予算も10倍くらい違う。自分たちが頑張ることでそういう状況を変えていければいいと思う。自分たちはリハビリの一環として

取材を終えて

『約束のメダル』を猪苗代に持って帰ってこれた本当にうれしい町民との約束を果たした鈴木猛史選手は笑顔でそう言った。

皆さんはバンクーバーパラリンピックに挑む日本代表選手の映像を見ただろうか。鈴木猛史選手の滑りを見ただろうか。バンクーバーで戦っていたのは紛れもなくアスリートたちだった。帰国後、あるテレビ番組に出演した選手たちが口々に言ったのは、諸外国と日本の、障害者スポーツなどを取り巻く環境の差だった。

この国から「障害者スポーツ」というカテゴリーを無くし、スポーツ選手としてみんなを応援したい。そんな国づくり、町づくりを進めていくことを「約束」しようと思っただけではないはずだ。
特集 約束のメダル 終わり



Photo by Isao Horikiri

銅メダルを獲得した大回転競技での滑り。荒れたバーンをものもしない安定したターンを見せた。



鈴木 猛史

TAKESHI SUZUKI

Profile すずき・たけし
駿河台大スキー部所属
猪苗代町蟹沢出身 猪苗代高卒
小学校2年生の時に交通事故に遭い両足を失う。翌年チェアスキーと出会う。
バンクーバーパラリンピックアルペンスキー男子大回転座位で銅メダルを獲得
趣味はカメラとインターネット、日本代表の同僚から「滑るアキバ」と呼ばれているとか 1988年5月1日生まれ